

韓国・南江流域における青銅器時代片刃石斧の製作と生産体系

尹 哉 彬 (森 貴 教・記)

I. 序文

韓国・青銅器時代における石器研究は編年、地域性、機能・用途、製作・生産体系などが主題となってきた。このうち、相対的に製作と生産体系についての研究成果は少ない方である。石器の製作と生産体系に関する研究現況は先行研究¹⁾を通して事例が整理されており、ここでは簡単に言及したい。

石器の製作は、石材の産地推定²⁾、未成品を通した製作工程の復元³⁾、製作技法⁴⁾についての研究があるが、生産体系に対する研究は概して石器製作専門集団の想定とその性格に焦点が当てられているようである⁵⁾。主に集落を中心として生産遺跡（遺構）を想定し、生産体系の復元と時期による変化相の検討、性格の把握がなされ、これを土台として石材または石器の流通・交易の問題まで研究範囲が拡大している。

こうした研究の対象は、相対的に一部の器種に集中する傾向がある。特に生産・流通に関する研究は玉、石剣、石鏃、石庖丁などを中心に論じられているが、これは産地が限定的な特定材質であったり、形態的変異が明瞭で時間的変化相を看取りやすい資料を中心に研究がなされてきたことに起因する結果と思われる。

ここで本稿では、これまでの議論で多く扱われなかった石斧を中心に製作・生産体系に対する問題に接近してみたい。石斧の中でも、比較的形態的変異が看取され、特定材質の石材で製作される場合が多い片刃石斧が研究対象である。

地域圏は南江流域^{ナムガン}に設定した。南江流域は河川両岸に広い沖積地が形成され、先史時代以来、人間活動の主舞台として全域にわたって青銅器時代早・前期から後期までの遺跡が多数分布している⁶⁾。1990年代後半、「南江ダム水没地区」に対する大規模発掘調査で蓄積された考古学資料を通し、目を見張るほどの青銅器時代の研究成果などが構築され⁷⁾、これに基づき南江流域は地域性が目立つ一つの「同一文化圏」として認識されている⁸⁾。大単位集落の分布とともに多種多量の石器に対する研究は、やはりその数は多くないが多角的な議論がなされているようである⁹⁾。

ここで先行研究の成果をもとに青銅器時代後期¹⁰⁾を石器製作体系変化の画期とし¹¹⁾、この地域の重要遺跡を前期－前期末・後期初頭－後期に区分して片刃石斧の製作と生産体系について検討したい。南江流域における青銅器時代の重要遺跡の分布を図1に示す。

Ⅱ. 片刃石斧の製作

片刃石斧は大きく扁平片刃石斧と柱状片刃石斧に分けられる。柱状片刃石斧は有溝石斧を含む広義的概念と、有溝石斧を除外し溝のない柱状片刃石斧の狭義的概念に細分される¹²⁾。柱状片刃石斧と有溝石斧は、型式学的変化過程において連続線上にある同一の器種と認識されており¹³⁾、筆者も旧稿でこれに同意し、有溝石斧を柱状片刃石斧の最も新しい型式に編年した¹⁴⁾。したがって柱状片刃石斧の名称は広義的概念として用いるべきだろう。しかし上述したように、石器製作の変化において後期が画期と考えられているので、後期の資料とみられる有溝石斧

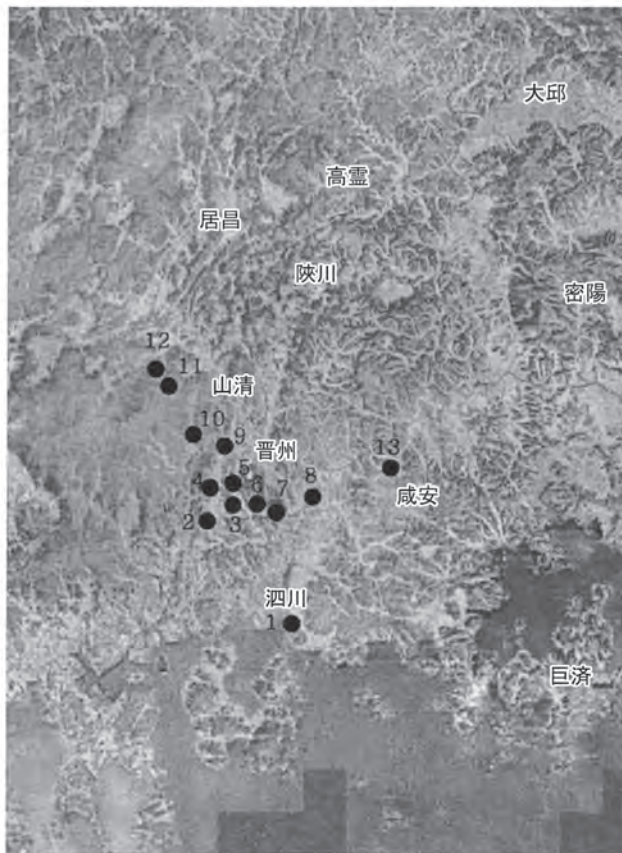
を柱状片刃石斧から区分したい。こうした区分は機能・用途的側面における差異を意味するものではなく、本稿では柱状片刃石斧は狭義的概念の名称であることを述べておく。

片刃石斧をはじめとする石斧の製作工程は、石材獲得－打撃を通した形態調整－敲打・研磨を通した外形調整－刃部研磨の段階を経て完成する¹⁵⁾。ここでは時期別の片刃石斧の形態を中心に製作の変化相を調べてみる。

1. 扁平片刃石斧

扁平片刃石斧は計126点の資料をサイズと平面形態で分類した。サイズは全長13cmを基準として小型と大型に分類される(図2)。小型は121点が全長6～8cmに集中し、大型は5点にすぎない。道具はサイズにより機能的な違いがあるものと推定されるが、扁平片刃石斧のサイズの偏重化は大型扁平片刃石斧の使用が頻繁ではなかったことを示す。

平面形態は長/幅比1.4と2.8を基準として、方形、長方形、細長方形に分類される(図3)。



1. 泗川・梨琴洞、2. 泗川・本村里、3. 晋州・貴谷洞、4. 晋州・上村里、5. 晋州・大坪里、6. 晋州・平居洞、7. 晋州・加虎洞、8. 晋州・梨谷里、9. 山清・黙谷里、10. 山清・沙月里、11. 山清・梅村里、12. 山清・下村里、13. 咸安・梧谷里

図1 南江流域における青銅器時代の主な遺跡

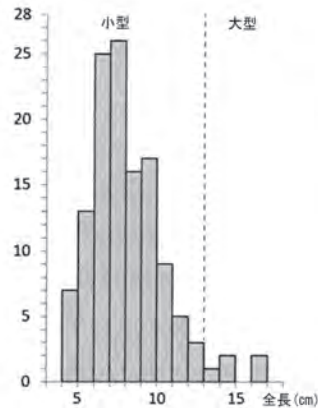


図2 サイズ分類

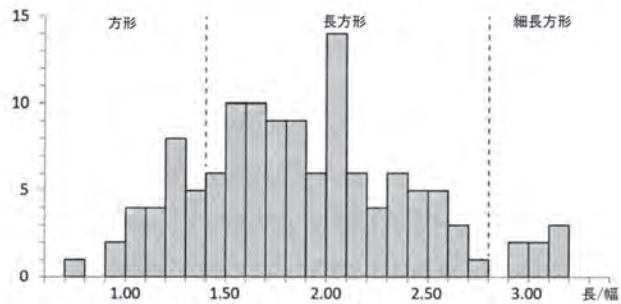


図3 平面形態分類

表1 扁平片刃石斧の時期別平面形態組成比

平面形態 時期	方形	長方形	細長方形	合計
早・前期	12(60%)	23(26%)		
前期末・後期初頭	3(15%)	23(26%)	1(20%)	
後期	5(25%)	41(41%)	4(80%)	
合計	20(100%)	87(100%)	5(100%)	112

このうち、時期の分かるもの112点を対象として平面形態組成の変化相をみたものが表1である。早・前期は方形と長方形、後期は（細）長方形が主に製作される。細長方形は5点中4点が後期に属し、平面形態が次第に細長くなる変化相が認められる（図4）。

こうした変化から着装との関連性を類推することができる。扁平片刃石斧は「┐」字形木柄の斧台に密着させるか、柄の割れ目に紐で固定して着装されるが、方形よりも（細）長方形の方が斧台との装着面が広く、より堅固に装着できる。また、（細）長方形の扁平片刃石斧は主面に打撃痕が残存する例が多いが、紐で結縛する際に固定を効果的にする人為的な痕跡だという見解がある¹⁶⁾。したがって製作の変化要因は装着の効率性を高める方向に変化したものと判断される。

2. 柱状片刃石斧と有溝石斧

柱状片刃石斧は前期後半、有溝石斧は後期に出現し、後主面が直→曲→段→溝（図5）のように変化するため2器種は型式学的に連続線上にある同一の器種と考えられる¹⁷⁾。柱状片刃石斧19点と有溝石斧10点は、全長17cmを基準に小型と大型に分類される（図6）。有溝石斧はすべて小型に含まれ、柱状片刃石斧は小型が6点、大型が13点確認される。柱状片刃石



1~4 : 本村里 ナ住3
5~8 : 漁隱1 住76
9~11 : 漁隱1 住77
12・13 : 玉房4 住9
14・15 : 玉房2 住15
16・17 : 梨琴洞 住10

1~11 : 早・前期
12・13 : 前期末・後期初頭
14~17 : 後期

住居址1/240, 石器1/5, 土器1/8

図4 扁平片刃石斧の製作の変遷

斧の後主面が直→曲→段に変化することは刃部の効率性と関連する。一般的に手斧類は運動方向が円運動で構成されるが（図7）、直→曲→段の変化相は対象物である木材への打撃時に手首に伝達される負担が少なく、木材を削る際の効率性が高まったことを意味する¹⁸⁾。こうした変化は前期後半という時間のなかで急速

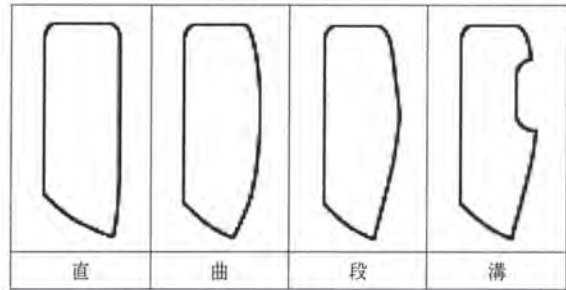


図5 柱状片刃石斧の後主面形態変化

に進んだが、作業の効率性を短期間に極大化したとみられる¹⁹⁾。ここで溝をもつ有溝石斧は、着装の効率性を加えて柱状片刃石斧の最も発達した形態と認識される²⁰⁾。

南江流域の柱状片刃石斧は他地域に比べ若干遅く出現したようである。欣岩里段階の細長方形住居址²¹⁾では確認されず、前期末のいわゆる「^{ハチヨニ}下村里型住居址」²²⁾の段階から出現したものとみられる²³⁾。

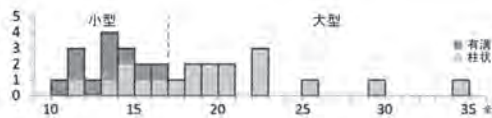


図6 柱状片刃石斧・有溝石斧のサイズ分類

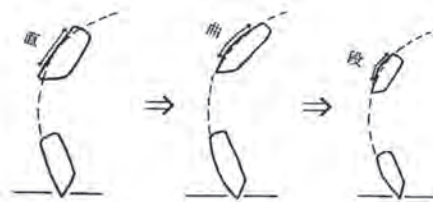


図7 後主面の円運動（裴真晟2013、注18前掲）

3. 片刃石斧の組成相

片刃石斧は早・前期に比べ後期に器種が増加する。前期には扁平片刃石斧のみが組成されるが、前期末・後期初頭に柱状片刃石斧、後期に有溝石斧が新たに出現し、器種の多様性を備えるようになる（表2）。また、片刃石斧全体の組成相をみると、早・前期に比べ前期末・後期初頭を経て後期に数量と組成比がともに増加する傾向も確認される。

しかし、単純に数量および組成比が増加した傾向のみによって片刃石斧組成相の変化から意味のある解釈を導き出すには限界がある。単純に数量の増加は当該時期における集落の規模（遺構の数）に比例する可能性も排除できないからである。そこで、青銅器時代の全時期にわたって大規模集落が存続した^{チンジュ}晋州・^{テピョンリ}大坪里遺跡の石器組成相を通して片刃石斧組成相の変化およびその意味を調べてみる。大坪里遺跡の石器相は南江流域全体の石器組成を完璧に代弁することはできなくとも、全期間存続する大規模集落であり、後述するように後期における石器製作専門集落であることをみれば、ある程度の器種構成は反映すると考えられる²⁴⁾。

表3は晋州・大坪里遺跡の青銅器時代前・後期の石器組成比である²⁵⁾。各器種の組成比で



1～3：玉房8 集石9
4・5：玉房4 住15, 6・7：玉房2 住17
8：玉房2 住15, 9・10：亀山洞(東義大学校博物館)住18
11：玉房4 炉5, 12：玉房4 環濠

1～3：前期, 4・5：前期末・後期初頭, 6～12：後期

住居址1/120, 石器1/5, 土器1/8

図8 柱状片刃石斧・有溝石斧製作の変遷

表2 時期別の片刃石斧の組成相（完形による集計、数字は出土量、括弧内は出土率）

時期 \ 器種	扁平片刃石斧	柱状片刃石斧	有溝石斧	合計
早・前期	35			35 (16.5)
前期末・後期初頭	27	41		68 (32.1%)
後期	50	32	27	109 (51.4%)
合計	112	73	27	212 (100%)

表3 晋州・大坪里遺跡（玉房・漁隠地区）石器組成比（尹哉彬、注24を修正引用）

時期 \ 器種		石劍	石鏃	石槍	両刃	扁平	柱状	有溝	石鑿	石槌丁	石鎌	磨石	敲石	砥石	土掘具	猪形石器	計
前期	数量	15	9	-	8	10	-	-	13	24	-	9	-	43	1	11	143
	%	10.5	6.3	-	5.6	7.0	-	-	9.1	16.8	-	6.3	-	30.1	0.7	7.7	100
後期	数量	41	311	15	47	60	78	43	39	125	48	116	14	257	12	259	1,465
	%	2.8	21.2	1.0	3.2	4.1	5.3	2.9	2.7	8.5	3.3	7.9	1.0	17.5	0.8	17.7	100
計		56	320	15	127	70	78	43	52	149	48	125	12	300	13	270	1,608

扁平片刃石斧は後期に減少する様相がみられるが、片刃石斧全体をみると前期（7.0%）から後期（12.3%）に増加する。すなわち木器加工工具の側面において組成比が増加した。また、後期の片刃石斧組成比は他器種と比較しても、石鏃（21.2%）、猪形（嘴形）石器（17.7%）、砥石（17.5%）を除くと高い。

こうした様相の要因は後期の農耕社会の定着とともに木製農耕具の需要が増えるにつれ、木器加工工具である片刃石斧の器種が多様になり数量が増加したことによるとみられる。前期後半に出現した柱状片刃石斧の急速な発達と、続く後期に有溝石斧が出現し木器を加工する石製工具セットが完備され、これを通して木製農耕具が活発に製作されたという裴真晟の見解²⁶⁾とも符合する。南江流域を中心に多数確認される大規模耕作遺構がこれを傍証するといえる。

Ⅲ. 片刃石斧の生産体系

1. 石材の産地

石器の製作における第1段階といえる石材の獲得は、主に露頭と河川でなされる²⁷⁾。これらを産地と呼ぶことができるが、考古学的な産地の概念は露頭か河川かはともかく、先史時代の人々が簡単に石材を採取できた地域、すなわち「ある地域、ある河川流域で該当石材を採取できる」という概念として理解される²⁸⁾。石材は露頭だけでなく河川でも採集できた

め、特別に大型の石器を除けば、むしろ河川に運ばれてきた礫を利用した方がより効率的だという見解がある²⁹⁾。

石材の産地調査は半径10kmを基準になされている³⁰⁾。その基準は歩いて行ける距離と想定されているが³¹⁾、狩猟採集段階の遺跡の常用資源開拓可能領域であるかは不明であり、10kmの範囲に特定石材の産地が存在しない場合は外部からの流入を想定することもある³²⁾。場合によっては、1日往復圏として集落間の日常関係が維持される距離である15km³³⁾を石材産地の範囲と設定することもできるだろう。

片刃石斧は大部分がホルンフェルスで製作されるが、周辺にホルンフェルス産地が存在するか、存在するならば利用が可能か、すなわち近距離で獲得したホルンフェルスか、遠距離から得られたものかについて検討が必要である。

嶺南地域のホルンフェルスは局地的に分布し、露出する露頭はほとんど確認されず大部分は河川礫として確認されるものが一般的である（図9）。黄昌漢によれば、河川礫は地質学的基準により円磨度と球形度で形態区分がなされる³⁵⁾。旧石器・新石器時代の石器の場合、低い球形度で高い円磨度の河川礫で製作する事例が確認され、石器表面の大部分に礫面が残存するが、これはそれ以上剝離が不可能であるためである。青銅器時代の石器未成品の場合、河川礫で製作した際に残存する表面の礫面がほとんど確認されないが、礫面を無くすためには非常に細かく調整するしかない。すなわち、河川礫で石器未成品を製作することは非常に難しく非効率的であり、磨製石器製作において円磨度と球形度が高い河川礫よりは露頭に近い場所で獲得した角材がより効率的だという見解が提示されている³⁶⁾。

南江流域の石材産地分析結果を参考にすると、晋州・大坪里遺跡（玉房4地区）は周辺で獲得できる頁岩を除外すれば、ホルンフェルスをはじめとする大部分の石材産地が、遺跡から10～15km離れた地点に分布すると報告されている³⁷⁾。晋州・耳谷里遺跡ではホルンフェルスを含め大部分の石材が遺跡から半径20km以内で獲得できたと報告されたが³⁸⁾、これは河川周辺での石材獲得を念頭に置いたものようである。

山清・梅村里遺跡は石材の大部分を占めるホルンフェルスと砂岩が遺跡周辺には分布しないが、砂岩の場合、遺跡から13km離れた地点で獲得可能だがホルンフェルスは産地推定が難しいと報告された³⁹⁾。山清・下村里遺跡は20km離れた地点にホルンフェルス産地が存在する可能性が提示された⁴⁰⁾。



図9 韓国東南部の表層地質図
(森、注34を一部修正引用)

表 4 晋州地域における青銅器時代の重要集落内石器平均保有量

遺跡	時期	住居 数量	石器総量	石器 平均保有量 (石器総量/住居数)	備考
大坪里	早・前期	43	272	6.3	住居址外の堅穴、集石、畠などで 石器多量出土
漁隠地区	後期	174	1,742	10.0	
玉房地区	後期	87	1,720	19.8	
耳谷里	前期	-	-	-	墳墓42点
	後期	8	3	0.4	掘立柱建物、堅穴、環濠、溝、 集石、地表などで386点出土
草田	早・前期	4	27	6.8	-
	後期	49	173	3.5	

2. 生産体系

I 章で言及した石器生産体系研究の全般的な動向において、議論の中心は自家消費を目的とした小規模製作以降、石器製作専門集団の登場が想定できるか、である⁴¹⁾。すなわち、製作専門集団を規定する基準を認識できるかであるが、片刃石斧の生産体系もまた、その他の石器と特別に区分されて生産がなされた状況は確認できない。したがって南江流域の主な遺跡の全般的な石器生産体系内で、片刃石斧の生産を推論しなければならない。

生産体系の研究は、遺跡または遺構内の石器製作と関連する痕跡の存在有無を把握することが一次的であるため、集落遺跡を中心に行われている。代表的な研究成果として孫駿鎬の論考⁴²⁾が挙げられ、これによれば前期には集落内消費を目的とした生産が行われ、他の集落ととの交易のための生産遺跡の存在も想定された。後期にも集落内消費を目的とする集落が存在するが、大部分の検討対象遺跡で集落内消費量を超える生産、すなわち交易を目的とした生産が確認され、こうした集落を半専門的専門製作集団の性格を帯びる石器製作専門集落と想定した⁴³⁾。

一方、黄昌漢は石器製作専門集団の定義と設定基準の曖昧さに疑問を提起し、集落内出土石器総量を住居数で割り、住居址1棟当たりの石器平均保有量を把握するという新たな案を提示した⁴⁴⁾。また、共同製作場の運営の有無を石器製作専門集落設定の最も重要な判断基準に置いた。

以上の研究で提示された基準が全般的に適切と考えられ、本稿は集落単位の巨視的な観点から石器生産体系を把握する黄昌漢の基準⁴⁵⁾を適用した。分析対象は早・前期から後期までの集落が比較的均等に確認される晋州地域に限定した。表4は晋州地域における青銅器時代の重要遺跡の集落内石器平均保有量を示したものである。

大坪里遺跡は漁隠地区と玉房地区に分かれるが、漁隠地区は青銅器時代の全時期にわたり集落が存続し、玉房地区は主に後期に集落が集中する⁴⁶⁾。近距離に住居群が密集する前期は両地区を単一集落とみることができる。ただし、後期には環濠を中心に漁隠集落と玉房集落

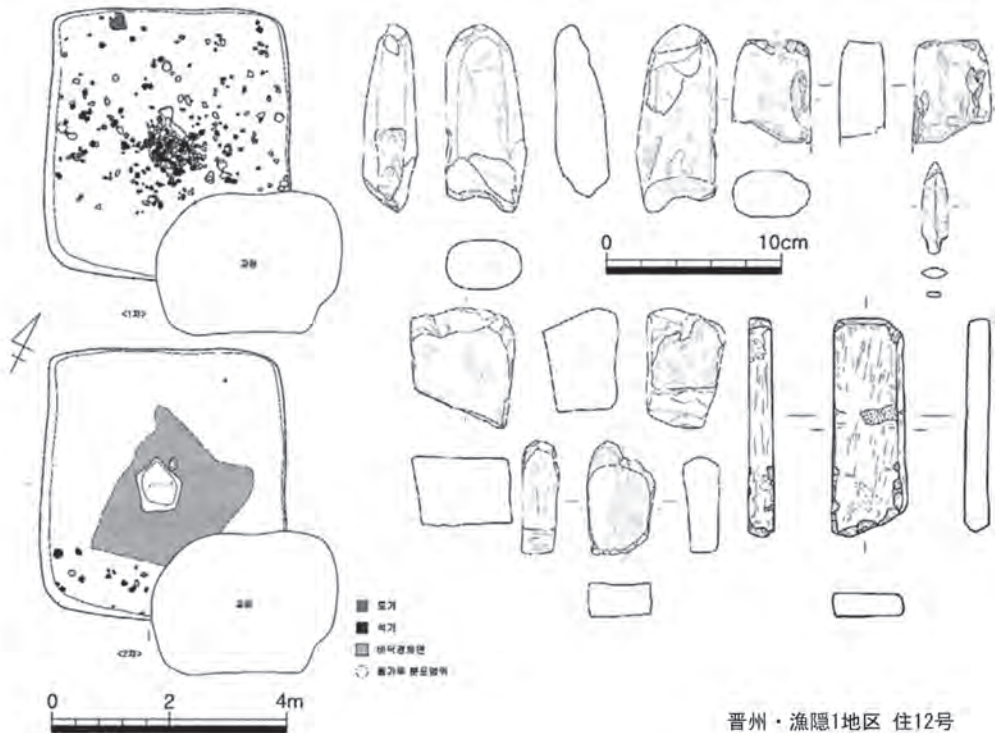


図10 漁隠集落の石器生産関連住居址

に区分される⁴⁷⁾。集落の石器平均保有量を調べてみると、前期に比べ後期に全般的に増加する様相がみられる。特に玉房地区は飛躍的な増加幅が確認される。これに対し草田遺跡は減少幅をみせており、後期の集落だけ形成される耳谷里遺跡は非常に低調な平均保有量を示す。

表4の結果をみると、前期は6点台の平均保有量が集落内の自家消費量と判断される。後期に平均保有量が急増する大坪里遺跡の集落が、石器生産専門集落と思われる。特に玉房集落が有力だが、玉房集落は南江流域でも代表的な中心集落とされている⁴⁸⁾。漁隠集落もまた石器生産専門集落と想定されており⁴⁹⁾、晋州圏域の後期の石器生産体系は玉房集落と漁隠集落を中心として、専門集団を通して生産された石器が周辺集落に分配された可能性がある。特に孫峻鎬は、漁隠2地区の後期の住居址内作業ピットで確認された石粉堆積層に注目した⁵⁰⁾、これは研磨作業の副産物として漁隠地区全般にかけて確認され(図10)、玉房集落は1次成形、漁隠地区は研磨作業に特化した分業化がなされた可能性もある。こうした点から表3のように、大坪里集落の前・後期の圧倒的な出土量をみせる砥石は示唆するところが大きく、片刃石斧の生産もやはりこのような体系のなかで行われたものとみられる。後期の集落である耳谷里遺跡は、住居址内は非常に低調な平均保有量(0.4点)であるのに比べ、住居址外の遺構と地表収集を通して386点の石器が出土した。しかし、未成品よりも破損品の

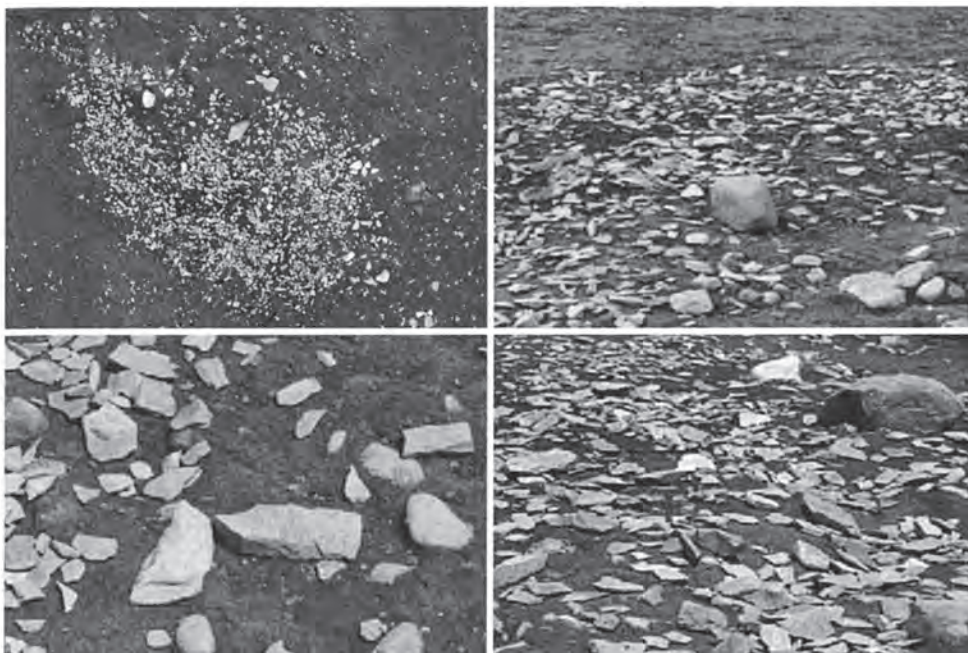


写真1 高霊・鳳坪里575-1遺跡（大東文化財研究院、注54を修正引用）

比率が高く、石器共同製作場が存在したとは思えない。それならば、環濠と掘立柱建物址を中心とした祭儀性の強い遺跡の性格⁵¹⁾はおくとしても、住居址外で多量に出土した石器の出所は、上述した後期の石器生産専門集落と想定した大坪里集落とみるべきではないかと考える。

このほか石器生産において注目される点は、長さが30cm程度のホルンフェルス製柱状片刃石斧である。上述した円磨度と球形度が高い河川礫よりは、露頭に近い場所で獲得された角材が石器製作において効率的⁵²⁾であり、こうしたホルンフェルス角材の産地は高霊・義鳳山一帯が唯一である。この周辺で鳳坪里575-1遺跡、大興里遺跡、快賓里遺跡など大規模石器製作場が分布している（写真1）。

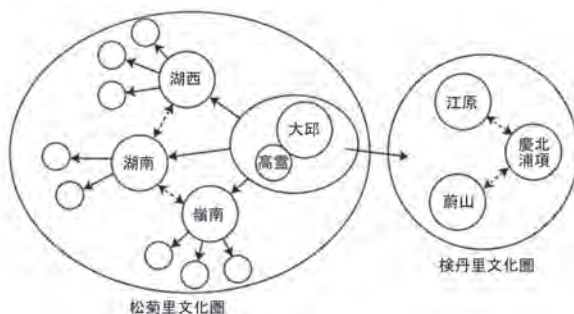


図11 ホルンフェルス製石器の流通網模式図

（黄昌漢2020、注1前掲）



図12 南江流域の大型柱状片刃石斧と未成品

晋州・大坪里玉房地区で長さが30cmに達する柱状片刃石斧が2点出土しており、このほかにも晋州圏域で出土した長さが20cmに迫るかそれ以上の柱状片刃石斧は未成品と破損品を含め計14点ある⁵³⁾。

晋州地域で、長さ30cm以上、柱状片刃石斧の幅を考慮して最小厚さ3～4cm以上のホルンフェルスが獲得できる産地の報告事例は確認できず、今のところこうしたホルンフェルス角材の産地を高霊・義鳳山一帯と推定するほかなさそうである。河川礫で石材を獲得できる可能性に対しては、石剣製作の事例を参考にするに円磨度の高い河川礫は薄く剝離することがほぼ不可能で、一般的に30cm前後で確認される石剣を製作できるほどのホルンフェルスの河川礫はほとんど確認されないという⁵⁵⁾。もちろん石斧は、製作を意図するものと似た形態の河川礫を選択し製作することが効率的だともいえるが、ホルンフェルスの特徴と長さ30cm程度の大型の石斧であることを考慮すると、やはり河川礫で大型柱状片刃石斧の製作は無理であると判断される。

黄昌漢はホルンフェルス製磨製石剣の産地推定、生産体系、流通網設定についての研究を通し、高霊地域の義鳳山一帯のホルンフェルス産地は有節柄式石剣段階である前期後半から本格的に利用され、後期には高霊・大邱^{テグ}地域を中心にホルンフェルス製石剣の生産と流通がなされたものとみた⁵⁶⁾ (図11)。高霊・義鳳山一帯の集落で1次成形された石材は、大邱地域の東川洞^{トンチョンドン}集落をはじめ八溪川^{バルゲチョン}一帯の石器製作専門集落に供給され、ここで集中的に製作された石剣が各集落に流通し、こうした流通網を通してホルンフェルス製片刃石斧も広域にわたって流通したものとみた⁵⁷⁾。こうした見解を参考にすると、晋州圏域で確認される大型の柱状片刃石斧、あるいはその石材は高霊地域から受給された可能性が高い。特に玉房1地区28号炉址出土品 (図12-2) と耳谷里遺跡地表収集品 (図12-3) は未完成の柱状片刃石斧であることをみると、完成品よりは石材の搬入に重きが置かれる。高霊・快賓里遺跡1号石棺墓で出土した天河石 (アマゾナイト) 製玉製品が、晋州・玉房遺跡の玉製作址と関連し、これを両集団間交流の対象物中の一つとされてもいる⁵⁸⁾。

以上を整理すると、南江流域の青銅器時代後期の中心集落である玉房集落の石器生産専門集団は、片刃石斧の生産に必要な良質なホルンフェルス石材の一部 (大型石材など) を高霊集団から受給したものと考えられる。また、耳谷里集落は石器の68%がホルンフェルス製であるが、相対的に砥石のような石製加工具 (14%) と石器未成品 (6%) の比率が低く⁵⁹⁾、住居内の石器平均保有量 (0.4点) が非常に低調 (表2) であることをみると、中心集落である大坪里集落 (玉房・漁隠集落) から完形を主とするホルンフェルス製石器が供給された可能性がある。未成品だが、図12-3のような大型の柱状片刃石斧がそうしたものの可能性を示唆するのではないかとと思われる⁶⁰⁾。

IV. 結語

南江流域における青銅器時代の片刃石斧の組成は、早・前期は扁平片刃石斧を中心に現れ、他地域よりも若干遅く前期末～後期初頭に柱状片刃石斧が出現し、両刃石斧、石鑿（ノミ形石斧）とともに石製工具セットが完成する。こうした機能的に改良された柱状片刃石斧の出現と展開は、木工技術の向上と直結した技術力の一新といえる⁶¹⁾。

続いて後期には扁平片刃石斧と柱状片刃石斧のサイズと形態が多様化し、有溝石斧が出現するなど、器種と数量が増加した様相がみられる。特に扁平片刃石斧は概して小型が多く、柱状片刃石斧は大型が多くなりながらも、新たに出現する有溝石斧は小型だけ確認される様相は片刃石斧の多様化と木器製作工程の体系化を示している。本格的な農耕社会へと進んだ後期に、木器の需要の増大は木器加工具の器種と数量を増加させ、機能的な発達を要求したものと推定される。

したがって南江流域の青銅器時代後期の社会は中心集落を中心として石器生産専門集団が登場し、より効率的な石器生産体系が整えられたようであり、片刃石斧もこうした体系のなかで生産されたものと思われる。

さらに墓に副葬される儀礼的性格のホルンフェルス製石剣流通網には、石剣の他に良質のホルンフェルス製石器が含まれていた可能性を排除できない。大型のホルンフェルス製柱状片刃石斧がその手がかりになり得る。

これまで南江流域の青銅器時代の片刃石斧を中心とした石器製作と生産体系について調べてみた。一部の器種で以上の主題を扱ったため限界は明らかだが、相当の研究がなされた他器種に比べ、ほとんど扱われてこなかった石斧を中心に研究を進めたことにささやかな意義を与えたい。

付記 本稿は2022年度加耶学術祭典「加耶 先住民の道具－石器－」（於 国立金海博物館、2022年7月21日）で発表した内容を修正・補完したものである。

注

- 1) 孫峻鎬「青銅器時代 石器生産体系 에 대한 初步的檢討」（『湖南考古學報』36、湖南考古学会、2010年）。孫峻鎬「青銅器時代の 石器製作과 生産」（『交流와 交通의 考古學』第43回韓國考古學全國大會發表資料集、2019年）。
黃昌漢「青銅器時代 石器 研究의 現況과 問題點－系統・機能・製作・生産體系에 對하야」（『遺物研究, 어떻게 할 것 인가?－土器와 石器研究의 現況과 課題－』2014年 韓國青銅器學會 遺物分科 워크숍、2014年）。
黃昌漢『青銅器時代 石器 生産 體系』（書景文化社、2020年）。
- 2) 李基星「石器石材의 選擇的 使用과 流通－日本 大阪平野地域을 中心으로－」（『湖西考古學』15、湖西

- 考古学会、2006年)。
- 黄昌漢「(岩石의 分析方法과 考古學的 適用)」『東亞文化』2・3、東亞細亞文化財研究院、2007年)。
- 孫峻鎬2010、注1前掲。
- 3) 黄昌漢「(青銅器時代 石器製作의 兩極技法 研究)」『韓國上古史學報』63、韓國上古史学会、2009年)。
- 李印學「(青銅器時代 集落内 石器製作 様相 検討)」(『韓國青銅器學報』6、韓國青銅器学会、2010年)。
- 4) 張龍俊「(先史時代 石器의 分別과 製作技法)」(『考古廣場』1、釜山考古学研究会、2007年)。
- 5) 孫峻鎬2010、注1前掲。
- 高旻廷・Bale, Martin T.「(青銅器時代 後期 手工業 生産과 社会 分化)」(『韓國青銅器學報』2、韓國青銅器学会、2008年)。
- 黄昌漢「(大邱地域 青銅器時代 石器生産 시스템 研究)」(『嶺南考古學』67、嶺南考古学会、2013年)。
- 黄昌漢2020、注1前掲。
- 洪周希「(北漢江流域, 青銅器時代 集落의 展開와 石器製作시스템의 確立)」(『韓國青銅器學報』5、韓國青銅器学会、2009年)。
- 6) 高旻廷「(南江流域 無文土器文化의 變遷)」(慶北大学校大学院 博士学位論文、2020年) 1頁。
- 7) 高旻廷「(南江流域 無文土器文化의 變遷)」(慶北大学校大学院 碩士學位論文、2003年)。
- 金炳燮「(南江流域 下村里型住居址에 對한 一考察)」(『慶南研究』4、慶南發展研究院歷史文化센터、2011年)。
- 宋永鎮「(南江流域 磨研土器의 變化와 時期区分)」(『嶺南考古學』60、嶺南考古学会、2012年)。
- 8) 李泯周「(南江流域 青銅器時代 磨製石器 研究)」(『韓國青銅器學報』16、韓國青銅器学会、2015年) 53頁。
- 9) 高旻廷・Bale、注5前掲。
- 全眞賢「(扁平片刃石斧의 機能과 用途에 關한 研究－南江流域 無文土器時代 出土品을 中心으로－)」(『韓國青銅器學報』12、韓國青銅器学会、2013年)。
- 李泯周、注8前掲。
- 10) 安在皓(2000)の新3時期案に立脚して時期区分する。
- 安在皓「(韓國 農耕社会의 成立)」(『韓國考古學報』34、韓國考古学会、2000年)。
- 11) 孫峻鎬「(韓半島 青銅器時代 磨製石器 研究)」(高麗大学校 博士学位論文、2006年)。
- 12) 裴眞晟「(韓半島 柱狀片刃石斧의 研究)」(釜山大学校 碩士學位論文、2000年)。
- 13) 裴眞晟、注12前掲。
- 14) 尹哉彬「(青銅器時代 東南海岸地域 片刃石斧 編年)」(『韓國青銅器學報』21、韓國青銅器学会、2017年)。
- 15) 李印學、注3前掲。
- 16) 全眞賢、注9前掲、39-40頁。
- 17) 裴眞晟、注12前掲；尹哉彬、注14前掲。
- 18) 裴眞晟、注12前掲。
- 裴眞晟「(柱狀片刃石斧의 再檢討)」(『韓國上古史學報』82、韓國上古史学会、2013年)。
- 19) 裴眞晟2013、注18前掲。
- 20) 裴眞晟、注12前掲。
- 21) 高旻廷、注6前掲。
- 22) 金炳燮、注7前掲。
- 23) 李泯周、注8前掲。
- 24) 尹哉彬「(南江流域 青銅器時代 石製道具 製作과 使用, 交流, 意味)」(『南江流域 青銅器時代의 技術』晋州青銅器文化博物館・慶尚国立大学校博物館 共同主管 第3回專門家學術會議、2022年) 25頁。
- 25) ここでは前期末・後期初頭を後期に含めた。いわゆる「下村里期」と命名される該当時期は後期への

移行過程にある過渡期的時期で、後期的様相により近い（安在皓2014、86頁）と判断されるためである（尹哉彬、注24前掲、18頁）。また、器種がわかる未成品も含めて集計した（尹哉彬、注24前掲、26頁）。

安在皓「検丹里遺跡 再考」（『韓国青銅器学報』14、韓国青銅器学会、2014年）。

- 26) 裴眞晟「石製工具의 確立과 展開」（『考古廣場』14、釜山考古学研究会、2014年）、37-39頁。
- 27) 黄昌漢2020、注1前掲。
- 28) 李基星、注2前掲。
- 29) 孫峻鎬2010、注1前掲、42頁。
- 30) 孫峻鎬2010、注1前掲、42頁。
- 31) 李基星、注2、37頁。
- 32) 孫峻鎬2010、注1前掲、42頁。
- 33) 安在皓、注25前掲、80頁。
- 34) 森貴教『石器の生産・消費からみた弥生社会』（九州大学人文学叢書13、九州大学出版会、2018年）。
- 35) 黄昌漢2020、注1前掲。
- 36) 黄昌漢2020、注1前掲、34-38頁。
- 37) 류춘길「附録1. 南江댐 水没地区内 晋州 玉房4地区 遺跡의 石器分析」（『晋州 大坪里 玉房4地区 先史遺蹟Ⅰ』東義大学校博物館、2008年）。
- 38) 孫岐周「V-3. 晋州 耳谷里 先史遺蹟 青銅器時代 出土遺物 小考」（『晋州 耳谷里 先史遺蹟Ⅱ』東亞細亞文化財研究院、2010年）。
- 39) 韓国地質環境研究所「附録1. 山清 金西 第2農工団地予定敷地内 山清 梅村里遺跡의 石器・石材, 玉, 堆積層 및 土器内部土 分析」（『山清 梅村里遺蹟』우리文化財研究院、2011年）354頁。
- 40) 韓国地質環境研究所「附録1. 山清-首都間 国道拡張区間内 遺跡의 第4期 古環境과 石器, 炭化穀物 및 炭化木材 分析」（『山清 下村里遺蹟Ⅱ』慶南文化財研究院、2011年）。
- 41) 黄昌漢2020、注1前掲、174頁。
- 42) 孫峻鎬2010、注1前掲。
- 43) 孫峻鎬2010、注1前掲、55-57頁。
- 44) 黄昌漢2013、注5前掲；黄昌漢2020、注1前掲。
- 45) 黄昌漢2013、注5前掲；黄昌漢2020、注1前掲。
- 46) 玉房4・5地区は漁隠地区の集落群に属するものとみなす（高旻廷、注6前掲）。
- 47) 高旻廷、注6前掲。
- 48) 高旻廷、注6前掲、126頁。
- 49) 孫峻鎬2010、注1前掲。
- 50) 孫峻鎬2010、注1前掲。
- 51) 裴德煥「V-2. 晋州 耳谷里 先史遺蹟의 環濠에 對한 小考」（『晋州 耳谷里 先史遺蹟Ⅱ』東亞細亞文化財研究院、2010年）459頁。
高旻廷、注6前掲、128頁。
- 52) 特別に大型の石器を除けば、むしろ河川礫を利用したほうがより効率的だという見解もあり（孫峻鎬2010、注1前掲、42頁）、小型の石器は河川礫で製作された可能性を排除できない。
- 53) 玉房2地区で一部頁岩製と報告された事例があるが、写真上の表面が白色に風化した点を見ると、ホルンフェルスの可能性が高いという黄昌漢の見解にしたがいホルンフェルスに分類した。
- 54) 大東文化財研究院（『高靈 鳳坪里 575-1 遺蹟』（財）大東文化財研究院 学術調査報告 第38輯、2012年）。
- 55) 黄昌漢「青銅器時代 혼펠스製 磨製石劍의 産地推定」（『考古廣場』9、釜山考古学研究会、2011年）

29頁。

56) 黄昌漢、注55前掲；黄昌漢2013、注 5 前掲；黄昌漢2020、注 1 前掲。

57) 黄昌漢2020、注 1 前掲、192-203頁。

58) 黄昌漢、注55前掲、44頁。

59) 東亞細亞文化財研究院『晋州 耳谷里 先史遺蹟Ⅱ』（東亞細亞文化財研究院 発掘調査報告書 第41輯、2010年）。

60) 報告者は遺跡周辺の潁川江流域を産地と報告し、難なく獲得したものと推定しているが（孫政周、注 38前掲）、上述したように大型のホルンフェルス角材を河川礫から獲得するのは容易ではない。

61) 裴眞晟2013、注18前掲；裴眞晟、注26前掲。

なお本稿の原著論文は以下のとおりである。

尹哉彬「南江流域 青銅器時代 片刃石斧의 製作과 生産体系」（『嶺南考古学』95、嶺南考古学会、5-23、2023年）（韓国語）。<https://doi.org/10.47417/yar.2023.95.5>。

本稿の翻訳および投稿にあたって、JSPS科研費（JP21K00970、JP22KK0009）の助成を受けた。

翻訳者追記

本論文の著者である尹哉彬氏は現在、大韓民国蔚山広域市に所在する（財）蔚山文化財研究院の研究員である。2015年、東国大学校大学院考古美術史学科に碩士学位論文「青銅器時代 東南海岸地域 片刃石斧 編年」を提出され、韓国・青銅器時代の磨製石器を主な研究テーマとして、近年精力的に論文を発表されている若手の研究者である。翻訳者は2016年4月、韓国・慶尚北道高靈郡の「層灰岩」¹⁾（本論文中ではホルンフェルスと呼称される）の石材原産地の野外調査に赴いた際に、現地を案内して頂いた同研究院の黄昌漢先生に尹氏を紹介して頂き、知己を得ることができた。

韓国では、本論文でも触れられているとおり、磨製石剣などの一部の器種を除けば、青銅器時代の石器やその生産体系に関する研究はあまり多くなく、研究者もまた限定的な印象である。こうした研究状況のなか昨年1月、『嶺南考古学』第95号に発表された本論文の内容は、弥生時代・文化や日韓交流などに関心をもつ多くの日本の研究者にとっても有益な点が多いと思われた。特に、弥生時代開始期のいわゆる大陸系磨製石器を構成する片刃石斧（挟入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧）の「系譜」や半島南部での製作状況、半島から列島への人々の移住（渡来）の問題を議論するうえで貴重な基礎的研究と考えられる。

ところで翻訳者らは弥生時代前半期における層灰岩製石器の石材原産地推定と生産体系に関して、考古学と岩石学・地球化学分野の共同研究を進めており、その過程で本論文に接した。石器に用いられた「層灰岩」の石材原産地については、様々な見解が提示されており、長らく不明であった。それはこの石材が東北部九州の下部白亜系関門層群脇野亜層群から対馬海峡を挟んだ朝鮮半島南部の慶尚（Gyongsang）超層群下部にかけて広範囲に分布し、地

質学的に原産地を絞り込むことが非常に困難であるためである。しかし近年、日韓の石材原産地の候補地である脇野亜層群（紫川・黒川流域、八木山川流域）と韓国慶尚超層群下部新洞（Shindong）層群（慶尚北道高靈郡義鳳山）の各「層灰岩」について、微量成分元素・希土類元素を含めた全岩化学組成が明らかにされ、石材原産地の判別図が提示された²⁾。そして、この判別図をもとに同様の地球科学的分析を考古資料に対して行った結果、福岡県下稗田遺跡や佐賀県吉野ヶ里遺跡など複数の弥生遺跡出土の層灰岩製片刃石斧の石材原産地は、韓国慶尚北道高靈郡義鳳山であると推定された³⁾。このことは、北部九州に居住する弥生時代の人々が、朝鮮半島南部の集団との交流関係のなかで外来の石材製石器を入手・使用したことを意味し、海峡を越えた集団間の文化接触や交流関係の一端を示唆する。

ただし、層灰岩製石器の生産・流通に関しては、日韓ともに石材原産地や石器生産遺跡の情報が断片的であるため不明な点が多いのが現状である。本論文では黄昌漢による一連の研究⁴⁾を参照したうえで、少なくとも大型の柱状片刃石斧を義鳳山一帯から供給されたものと推定しているが、片刃石斧総体の石材利用と生産体系については、時期的な変遷も含め細かな議論が必要である。黄昌漢によれば、ホルンフェルス自体は高靈地域以外に大邱、蔚山地域でも多く認められるとされる⁵⁾。また、洛東江の支流である琴湖江流域の遺跡（大邱・梅川洞遺跡や西邊洞遺跡など）では、河川周辺で石器素材の粗割を行い、粗割した素材を集落に持ち込み集落内で製品化されたと考えられている⁶⁾。小型の柱状片刃石斧や扁平片刃石斧は形態の変異がやや大きいことをふまえると、筆者も注52で述べるように、大坪里遺跡での生産のみでなく、各集落近郊の河川流域を単位とした個別的な石斧製作も一定程度存在したと考えられる。さらに、後期に出現する有溝石斧のなかには柱状片刃石斧とは質の異なる石材製のものも含まれ、型式学的・製作技術的にみても連続的な変化が追えないことから、翻訳者は後期の片刃石斧の生産体系・流通網はより重層的で複雑なものであったと考える⁷⁾。

いずれにしても韓国側での分析試料の蓄積、特に嶺南地域内の小地域ごとの「層灰岩」石材に対する堆積学的・地球化学的解析とともに、片刃石斧未成品や製作剥片・チップを対象とした製作技術的検討など、考古学的分析をさらに進める必要がある。こうした分析を総合化することにより、本論文で提示された石器生産体系や流通網に関するモデルを検証していくことが今後の課題といえよう。

なお本論文では青銅器時代が分析の対象とされているが、同じ南江流域の遺跡では初期鉄器時代（円形粘土帯土器期）にも同質の石材を用いた有溝石斧や扁平片刃石斧の製作が継続したものと考えられる⁸⁾。北部九州ではむしろ初期鉄器時代に並行する弥生前期末～中期初頭に層灰岩製片刃石斧の出土量が増加するため⁹⁾、当該期における半島での石斧の製作状況と列島における分布現象との関連が注視される。

こうした弥生時代並行期の片刃石斧のように、海峡を跨いで広域的に分布する同質の石器については、日韓の研究者が研究史や問題意識を共有しつつ、国際的・学際的に協力して研

究を行っていく必要があることは言を俟たない。本論文の翻訳がそうした研究の一助になれば幸甚である。末筆ながら論文の翻訳を快諾して頂いた尹哉彬氏に厚く感謝申し上げる。

注

- 1) 日本の考古学分野において発掘調査報告書などで慣例的に用いられる岩石名である。韓国では本論文中でも述べられているとおり、同質の岩石についてホルンフェルス(혼펠스)もしくは泥岩ホルンフェルス(이암혼펠스)と呼称されることが一般的である。この岩石は、暗色層と明色層の互層をなす。単層の層厚は0.5mm～5.0cmで、暗色層は黒色～暗灰色の泥岩～極細粒砂岩、暗緑色～緑灰色の泥岩～極細粒砂岩からなり、明色層は淡緑灰色～白色の泥岩～極細粒砂岩からなる。これらの層構造を切つて方解石脈が認められる場合もある(柚原ほか2022)。
柚原雅樹・梅崎恵司・森貴教・川野良信「下部白亜系脇野亜層群と慶尚超層群新洞層群の層灰岩の全岩化学組成の比較」(『地球科学』76-4、2022年)221-235頁。
- 2) 柚原ほか、注1前掲。
柚原雅樹・梅崎恵司・森貴教・川野良信「北部九州, 下部白亜系脇野亜層群のいわゆる層灰岩の全岩化学組成」(『地球科学』74-4、2020年)157-170頁。
- 3) 森貴教・柚原雅樹・渡部芳久・梅崎恵司・川野良信「吉野ヶ里遺跡出土層灰岩製石器の石材原産地推定と考古学的意義」(『九州考古学』98、2023年)23-39頁。
Mori, T., Yuhara, M., Umezaki, K., and Kawano, Y. 2022. Estimating the sources of stone tools made of tuffites during the Yayoi period and their archaeological significance, Japanese Journal of Archaeology 9(2): 117-140.
- 4) 黄昌漢「青銅器時代 혼펠스製 磨製石剣의 産地推定」(『考古廣場』9、釜山考古学研究会、2011年)。
黄昌漢『青銅器時代 石器 生産 体系』(書景文化社、2020年)。
- 5) 黄昌漢2011、注4前掲。
- 6) 黄昌漢2011、注4前掲。
- 7) 森貴教『石器の生産・消費からみた弥生社会』(九州大学出版会、2018年)48頁。
- 8) 例えば慶尚南道山淸郡漢濱(한빈)遺跡や河東郡ティバツコル(떡밭골)遺跡で片刃石斧の未成品や多数の製作剥片が地表採集されている(趙榮濟1983)。遺跡で採集された土器と有溝石斧の型式から、初期鉄器時代(円形粘土帶土器期)を主体とする時期の所産とみられる。2023年12月に慶尚国立大学校博物館の宋永鎮先生のご教示のもと、採集資料を観察させて頂いた。
趙榮濟「西部慶南 先史文化 地表調査 報告 (I) - 河東郡 玉宗面 -」(『釜山史学』7、釜山大学校史学会、1983年)。
- 9) 森、注7前掲、88頁。
下條信行(編)『弥生時代大陸系磨製石器の編年網の作製と地域間の比較研究』(平成5年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書、1994年)。